

# 人生の後半戦は ユネスコ活動とともに

「新渡戸稲造が生み育てた平和の心をつなげるために」

## はじめに

「戦争は人の心の中に生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章の理念に共鳴した仙台市民有志により、世界最初の民間ユネスコ運動「仙台ユネスコ協力会」（現・社団法人仙台ユネスコ協会）が、昭和二十二年に仙台に誕生しました。

私は、今、この仙台ユネスコ協会で常勤の理事長（無報酬のボランティア）として、人生の後半戦をユネスコ活動とともに過ごしております。

私が公務員生活四十年間（仙台郵便局職員五年、岩手県庁職員三十五年）と、国と県が出資している第三セクター（株

岩手ソフトウェアセンター）での三年間の勤務を終えて、生活の本拠を盛岡から仙台に移した時から、ユネスコ活動との縁ができました。

岩手県庁に勤務していた時は、ただただ忙しい日々を仕事に追われて過ごしており、退職後どのような生活を送ろうか考える余裕はありませんでした。

ただ、私は、四歳の時に父親が事故死し母子家庭に育ち、多くの人たちの助けをうけて夜間高校・夜間大学を卒業したので、学校を終えたら公務員になって世のため人のため、岩手県のために働くことを夢見ていたことはたしかです。

その夢が実現して岩手県職員となり人生の前半戦を無事終了となりましたが、やはり、人生の後半戦も世のため人のた



小野寺 彰

(社) 仙台ユネスコ協会 理事長

【おのであきら】昭和16年生まれ。一関市出身。仙台郵便局に勤める傍ら、昭和40年に東北学院大学文経学部二部経済学科卒業、同年岩手県庁入り。東京事務所企業立地課長、一関地方振興局長、監査委員事務局長を経て、平成12年に（株）岩手ソフトウェアセンター代表取締役副社長に就任。平成15年に退任後、同年より（社）仙台ユネスコ協会事務局長。平成17年より現職。また、宮城県在住者による岩手応援団「鬼の手会」事務局長も務める。

め、岩手県のためになることをしながら送りたいものだなあと感じていました。

岩手県庁を退職する頃、仙台で一人暮らしをしていた妻の母親が、九十歳を目前に体調を崩し、いつまでも一人暮らしをさせておけなくなり、私と妻は仙台に生活の本拠を移すことになり、思いがけずも人生の後半戦のフィールドは仙台となったのです。

そして今は、仙台ユネスコ協会のほか、「在仙岩手県人会」の事務局や岩手県内で勤務した経験者で組織した岩手を応援する会「鬼の手会」の事務局を担当するなど、岩手県との関わりのあるボランティア活動で忙しい毎日を送っており、むしろ人生の前半戦以上に充実した生活となっております。

このように、今の私の生活は、子供の頃に周りの多くの人々のお世話になったことから、世のため人のため、そして岩手県へのご恩返しをしようという心の奥底に潜んでいた願望が実現したものになっていると思っております。

## 民間ユネスコ運動との出会い

仙台に転居した後の身の振り方を考えていた際、私は、岩手県庁の出先機関である一関地方振興局の局長として勤務していた時に、管内の平泉町と一緒に「平泉の文化遺産を世界遺産に登録する運動」を推進していたことを思い出し、世界遺産はユネスコが登録していることから、何か手伝えないかと仙台ユネスコ協会を訪ねました。

当時、仙台ユネスコ協会は、八十歳を過ぎた会長と女子事務員だけで事務を執っていたことから、私が訪れると即座に事務の手伝いを要請されました。それも無報酬のボランティアで！

私は、そこに「ユネスコ」との運命的



世界の民間ユネスコ運動のメッカ

な出会いを感じたのです。

冒頭に述べたように仙台は、世界における民間ユネスコ運動発祥の地でありま

す。ユネスコの松浦晃一郎事務局長は、仙台ユネスコ協会が昨年発行した民間ユネスコ運動発祥六十周年記念誌に祝辞を寄せられました。その中で「ユネスコ憲章の理念の普及に努め、ユネスコの目的の実現化を市民の立場から目指す非政府組織はこの六十年の歴史をユネスコと共に歩んできました。仙台において発祥した草の根ボランティア運動は現在三千七百にも上るユネスコ・クラブ発足という形でおよそ九十カ国に広がっており、ユネスコの大切な民間パートナーとしての位置を占めています。ユネスコの精神に共鳴し、民間ユネスコ運動推進に携わっている世界中の人たちにとって『仙台』という言葉は特別な意味合いをもっており、ユネスコ民間運動の歴史を語る上で切っても切れないものとなっています。」と、仙台ユネスコ協会が世界の民間ユネスコ運動のメッカであることを強調されておられます。

また、前仙台市長の藤井黎氏は、同記念誌の挨拶で「民間ユネスコ発祥の地・仙台の名は、平和を希求する仙台市民の誇りとともに不朽であります。」と、世界に先駆けて発祥した誇りある仙台の民間ユネスコ運動の意義を再認識するよう

記しておられます。

このように歴史と伝統のある仙台ユネスコ協会で、ユネスコ活動に携わることができるのは、身に余る光栄であり、また、子供の頃から心の奥底に眠っていた「世のため人のためになる」という夢を実現できることでもあることから、年金だけの生活は大変厳しいところですが、あえて無報酬ではあっても引き受けることにしました。

## ユネスコと新渡戸稲造

ユネスコは、「国際連合教育科学文化機関」の英文の頭文字で作った略称ですが、第二次世界大戦が終わった昭和二十一年に国際連合の専門機関として創設され、現在加盟国は一九一カ国（日本の加盟は、昭和二十六年）、パリに本部が置かれています。

このユネスコの母体となったのが、国際連盟の事務次長であった新渡戸稲造が大正十一年に創立した「国際知的協力委員会（フランスから哲学者アンリ・ベルグソン博士（座長）、科学者キューリー夫人、ドイツからアインシュタイン博士、イギリスからギルバート・マレー、日本から田中館愛橘など当時の世界的に有名な知的リーダー十二名が参加）」でした。

新渡戸稲造は、「武士道」を著し、また、「われ太平洋の架け橋とならん」と



新渡戸稲造

という言葉で、多くの方に知られています。また、近年五千円札の肖像画で更にその存在感を増したのです。

ところが、新渡戸稲造が岩手県盛岡市の出身であることはあまり知られていません。盛岡市には、新渡戸稲造の生誕の地と盛岡市役所構内に銅像が建っています。

ユネスコの前身となる「国際的協力委員会」を創立し、その代表幹事として世界平和の構築に献身的な尽力をされた新渡戸稲造と同じ岩手県出身の私が、世界で初めて民間ユネスコ運動を始めた仙台ユネスコ協会に、ご縁の出来たことは、望外の喜びでした。

## 清衡の願いとユネスコ

岩手県は、ユネスコとの関わりでもうひとつ重要な縁があります。

今、世界的にブームとなっている世界遺産は、ユネスコが毎年、世界遺産委員会の審議を経て登録しているものですが、先に記したように平泉の文化遺産は、「浄土思想を基調とする文化的景観」として、平成十八年十二月に政府が正式にユネス

コ世界遺産センターに登録の推薦書を提出し受理されました。既に昨年七月に専門家による現地調査が済み、今年の七月にカナダのケベックで開催される世界遺産委員会で審議が行われ、正式に登録が決定されます。

八百年以上も前に平泉の地に華開いた文化遺産すなわち「浄土思想を基調とする文化的景観」は、奥州藤原三代の初代藤原清衡がその礎を築いたのでした。

清衡は、平泉に戦乱の世から平和な安らぎの浄土の世界を築こうとしたそのお心を、『中尊寺供養願文』のなかで「戦いをやめ、自分自身が心の中から憎しみの心を消し、自分自身の心の中に平和への窓を開いた」と述べられています。これこそまさにユネスコ憲章の理念なのです。

清衡は、冒頭に記した「戦争は人の心の中に生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章の理念を実に八百年以上も前に先取りして、戦いのための砦ではなく、今に残る中尊寺や金色堂を始めとするお寺を造ったのです。

清衡のこの選択ゆえに平泉は、東北（清衡の統治範囲は、南は福島県白河関、北は青森県外が濱です。）の中心都市として繁栄し、百年の間、争いも戦いもない平和な世界を築き上げ、「浄土思想を基調とする文化的景観」として八百年

後の今に残ることができたわけですね。

清衡が心の中に築いた強固な平和の砦を具現化した結晶が平泉の文化遺産であり、その背景にある高い精神性こそが世界遺産に最も相応しいとして、政府が世界遺産としての登録を推薦したのでした。

私は、今、東北ブロックユネスコ連絡協議会の事務局長として、平泉の世界遺産登録が実現するよう、東北全体にこの運動の輪を広げ、機運醸成に努めております。この運動を私は、在仙岩手県人会事務局担当の常任理事として、また、岩手を応援する会「鬼の手会」の事務局長として、あらゆる機会を捉え、展開してまいります。

こうした活動を通じて岩手のためにと、微力ではありますが、全精力を注いでいるところです。

十年前に一関地方振興局長として関与することができた平泉の世界遺産登録への運動に、今、仙台の地にあつて再び直接関与出来る立場にあることに、しみじみと縁の深さを感じています。



中尊寺金色堂（岩手県庁ホームページより）





「つなげよう平和の心」を掲げた記念式典

## 民間ユネスコ運動 発祥六十周年

仙台が民間ユネスコ運動発祥の地であることは前述しましたが、昨年であり、六十周年になることから、七月十九日・二十日に盛大な記念式典（兼東北ブロックユネスコ活動研究会宮城大会）を開催しました。東北各県のユネスコ会員や宮城県民が述べ九百人も参加して、盛大に

挙行することができましたが、この式典のプログラムの中心に「新渡戸稲造」と「平泉の文化遺産」を据えたのには、深い意味がありました。

六十年は、人間の歳でいえば還暦にあたります。そこで式典も「温故知新」ユネスコ運動の原点を尋ねるためにも、ユネスコの前身となった「国際的協力委員会」の創設者・新渡戸稲造の平和への心を学ぶべきであるとの思いから、法曹界に身を置きながら、新渡戸稲造研究の第一人者として名高い元検事総長の原田明夫氏に記念講演を依頼しました。原田明夫氏は、岩手県の盛岡地方検察庁検事正の時に新渡戸稲造の人間性や思想にふれ、爾来今日まで新渡戸稲造研究を続けてこられた方です。

原田明夫氏は、今、弁護士のほか東京女子大学理事長や社団法人日本ユネスコ協会連盟議員などの要職に就かれ、ご多忙な毎日ではありますが、私は、岩手県庁職員時代からのご縁をたよりに厚かましくも上京して直接お願いをいたしました。

「戦後間もない時期に、日本各地で民間の立場で国際平和を願い、諸国民との理解と協力を深める運動を始めた先人の方々の想いを学び、連綿とその火を絶やさず守ってきた民間ユネスコ関係者の地道な努力に敬意を抱いてきた」と話された原田明夫氏は、私の意とするところを

ご理解いただき、お忙しいところにも拘わらず快く講演を引き受けてくださいました。

原田明夫氏の熱誠溢れる講演（演題「ユネスコの生みの親・新渡戸稲造を語る」）は、参加者に大きな感動を与えました。

原田明夫氏は、講演の結びに「新渡戸稲造が生み育てようとした平和への理念と行動の事績は、東北地方が生んだ偉大な人物のものとして記憶にとどめたいと思います」と述べられ、「日本ユネスコ運動が民間で受け止めて始まった仙台からの輪を大切にしていかなければならない」と、東北各地から参加したユネスコ関係者にエールをおくられました。

二日目に特別講演の講師として、ご登壇いただいたのは、前東北歴史博物館館長の工藤雅樹氏でした。

工藤前館長は、岩手県が政府に平泉の文化遺産を世界遺産に登録して欲しいと推薦書を提出しましたが、その作成委員を務められ、平泉の歴史と文化遺産の研究者としても、大きな足跡を残されている方でしたので、特別講演（演題「平泉の文化遺産を世界遺産へ」）は参加者に大いに期待されていました。

工藤雅樹氏は、「平泉の世界遺産のキヤッチフレーズは『浄土思想』です。平泉のお寺はいずれも阿弥陀如来などの仏様がいらっしやる浄土を地上に再現したものだといえます。代表的なものは、中尊



民間ユネスコ運動発祥記念碑「ブーツの娘」  
「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章の精神に共鳴し、世界最初の民間ユネスコ協会が1947年7月19日、仙台に誕生しました。この像は、民間ユネスコ運動の発祥を記念し1984年7月に日本で開催された「民間ユネスコ運動世界大会」の機会に、仙台出身の世界的に著名な彫刻家 佐藤忠良氏に制作を依頼して、この地に建立したもので、平和をもとめ、未来をみつめる若者の姿を表したものです。(台座の碑文より。仙台市榴ヶ岡公園に建立。1984年7月19日除幕。写真撮影：小野寺彰。同じ像が、バリのユネスコ本部に寄贈され、松浦晃一郎事務局長の専用レストランのバルコニーに仙台の方角に向けて設置されています。)

したのです。

## 若い世代へつなぐ平和の心

六十周年記念式典には、多数の小・中学生、高校生、大学生が様々な役割で参加したことも大きな成果となりました。

式典の受付などの運営面では、仙台白百合女子大学の学生がボランティアとして大活躍してくれたほか、白百合学園中学高校オーケストラ、NHK仙台少年少女合唱隊の熱演は、参加した東北各県のユネスコ関係者に高く評価され、式典の盛上げに大いに貢献しました。

日本ユネスコ協会連盟の新しい運動方針では、そのメインテーマを「つなげよう 平和の心」とさだめ、ユネスコ運動を若い世代に繋いでいくことに全国のユ

ネスコ協会が取り組むことを呼びかけています。

仙台ユネスコ協会では、この「つなげよう 平和の心」を記念式典兼ブロック研究会のメインテーマに設定し、若い世代の参加を積極的に図りました。

民間ユネスコ運動発祥六十周年記念事業推進協議会の藤井黎会長は、記念式典の式辞の中で「今回の司会・受付・案内を担当してくれております仙台白百合女子大学の皆さんのこの意欲は、私たちの未来への大きな期待と可能性を実感させてくれ、心に強く感じさせてくれます」と述べられ、その活躍を高く評価してくださいました。

このたびの式典へ参加した小・中学生、高校生、大学生は、この式典に参加したことを通じてユネスコが目指す平和の心を学ぶことができ、改めて平和の尊さを認識して貰えたものと自負しています

## 人生はサッカーの試合

日野原重明さんは、星野富弘さんとの対談(「たった一度の人生だから」日野原重明・星野富弘共著(いのちのことば社))の中で、「人生は、サッカーの試合と同じである。六十歳までが前半戦、六十歳過ぎたら後半戦」と話されており、私は六十六歳なので、既に人生の後半戦に入ってしまった。公務員生活を退職したところで、人生の前半戦を

寺金色堂です。毛越寺の庭園もまた浄土をかたどったものです。二代秀衡が作った無量光院も阿弥陀如来の浄土を地上に再現されているということになります」と強調され、「平泉のキャッチフレーズのひとつである『文化的景観』という言葉は、耳慣れないと思いますが、平泉に即していえば、歴史的な雰囲気には満ち満ちている」と、過去の栄華の痕跡だけではなく、現代にも息づいている平泉の文化遺産の素晴らしい価値とそれを取り巻く景観の魅力をあますところなく話されました。

お二人の講演は、奇しくもユネスコと岩手の縁の深さを如実に示されましたが、このたびの六十周年記念式典のプロデューサー兼ディレクターとして一切を切り盛りした私の密かな試みは、見事に成功



## ユネスコ豆知識

## ユネスコとは

国際連合の専門機関である教育科学文化機関（United Nations Educational Scientific Cultural Organization）の英文の頭文字をつないで作られた略称（UNESCO）です。

ユネスコは、その名のとおりに国連傘下の独立した専門機関のひとつで、昭和21年（1946）の創設以来、フランスのパリに本部を置いている。

現在の事務局長は、日本人の松浦晃一郎氏（元フランス大使）。アジア地域から初めて就任した人で現在2期目（通算9年目）である。

なお、ユネスコの前身は、国際連盟の「国際知的協力委員会」です。委員会のメンバーは、アインシュタイン、キューリー夫人など国際的に著名な学者や科学者が名を連ねていました。この「国際知的協力委員会」を創設し、その代表幹事として熱心に活動を続けたのが岩手県出身の新渡戸稲造（国際連盟事務次長）でした。第二次大戦後にこの委員会の活動を引き継いで誕生したのが、「ユネスコ」なのです。

## ユネスコの目的

ユネスコの目的は、教育・科学・文化といった広範にわたる各分野を通じて、世界中の人々がお互いに無知や偏見をなくし、国や民族という枠組みを越えてコミュニケーションを深め、協力し、共に生きる平和な社会をつくり人類の福祉の促進を図っていくことです。

## ユネスコのシンボルマーク

世界遺産に登録されているアテネのアクロポリスの丘（文化遺産・ギリシャ）にある「パルテノン神殿」を形とったものです。

この神殿に祭られているアテネの守護神が、『智の神』アテナ・パルテノスであることからユネスコの図案として採用されました。



仙台からパリのUNESCO本部へ世界初の民間ユネスコ運動を伝える第一報は、障子紙に英文で書かれていた。

昭和22年7月19日世界で最初の民間ユネスコ協会としてスタートした仙台ユネスコ協会は、ユネスコのジュリアン・ハックスレー事務局長にあてて、「戦争を拒絶し、平和をもちたてる運動は、国家の指導者や少数の人びとに委ねることなく、心に平和のとりでを固めた人びとによって広くすすめられるべきだ」とのメッセージを送りました。

この手紙は世界中で大きな反響を呼び起こし、昭和22年11月第2回ユネスコ総会では日本の民間ユネスコ運動が紹介されました。同時に日本国内でも、政府や国会にも波及し、政府・民間の協力による一大運動に盛り上がり、日本のユネスコ加盟への気運を高めていきました。（日本がユネスコに加盟を認められたのは、国際連合に加盟する5年前のことでした。）

このことがやがて、わが国が国際社会への復帰を果たす原動力になったと高く評価されています。

## 7月19日は「民間ユネスコ運動の日」

昭和22年7月19日、民間ユネスコ運動が世界に先駆け、仙台で始まりました。私たち民間ユネスコ運動の担い手は、世界の平和を希求するためにさまざまな活動を実施することで相互の連帯を強め、世界と未来の世代に対してその存在意義を強くアピールするとともに、国民の皆さまにより一層のご理解とご協力を求めるために「民間ユネスコ運動の日」を7月19日と決めました。

終えたわけではありませんが、その休憩タイムに後半戦の作戦をじっくりと練るべきところを、満足に休みもせず、また、目標も計画も作戦もたてずに闇雲に後半戦に突入した感があります。

しかしながら、今、これまでの後半戦を振りかえって見ますと、自分の生い立ちに根ざした意識の奥底に眠っていた「世のため人のため」になりたいという願望が、ユネスコ活動をとおして、ちゃんと

実現しているのではないかと思えるのですが、仙台に生活の本拠を移してまだ五年ですが、人生の後半戦を仙台という新たな

フィールドでスタートしたわずか五年の間に、ユネスコ活動や在仙岩手県人会、鬼の手会（岩手を応援する会）のご縁で実に多くの方々にご交誼いただいております。これらの人々は、私の人生後半戦のサポーターとして、大きな力となつていただけるものと思います。

## おわりに

清衡が願ひ、新渡戸稲造が生み育てようとした永遠の平和な世界は、現下の世界情勢を鑑みるに、はるか遠い道のりではありますが、民間ユネスコ運動発祥

六十周年を機に「温故知新」・創立時の先達の「平和への志」を学び未来に語りつないでいくことは、民間ユネスコ運動に携わる全ての者の役割なのです。

日本ユネスコ協会連盟の松田昌士会長は、六十周年記念式典の祝辞で「民間ユネスコ運動の使命は、絶対に戦争のない平和な時代がくるということを信じて、地道ではあるがため努力を続けることにつきる」と述べられました。

私の敬慕していた中村直岩手県知事（故人）が私に書いてくださいました色紙の「志は千里に在り」ということばを胸に、たとえ永遠の平和が千里の彼方にあつたとしても、これからの私の人生の後半戦は、世界最初の民間ユネスコ運動をスタートさせた先人の熱き想い（戦争を拒絶し平和を盛立てる運動が、国家の指導者と少数の代表者に任せて置かれるべきではなく、国民の各々の心の中に於て今即時に始まらなければならない）（ユネスコ協力會発會聲明）を、若い世代につないでいくことを使命として、地道に務めていきたいと思っております。

そして、私自身の人生後半戦のフィールド内でのユネスコ活動と表裏一体のものとして、在仙岩手県人会や鬼の手会（岩手を応援する会）の活動をとおして、微力ではありますが故郷・岩手のサポーターとして仙台からエールを送り続けていきます。